Junko Higasa

自己完結

『吾輩は猫である』の苦沙弥先生が鏡を覗くシーンで「自己の世界だけで完結する」ナルシスが語られ、「それではいけない」と提唱する M.マルクハーンの『メディア論』の紹介があったが、私は連想的にそのことに思い至る現実をすぐに体験した。

ある人が「〇〇さんがこう言うから、その希望を叶えてやりたい」という。私はその気持ちは優しくてよいとは思う。けれどそこで問題なのは、本当に相手のためを思ってそうしたいのか？そうすることが本当に相手のためになるのか？ということである。さらに言えば、その人の希望通りに行うことは、多くの人に有益になるか不利益になるかということである。大衆は自分の言うことを叶えてくれる人に「いい人ねぇ」と感謝する。「やってあげたいが、その人個人のためになっても多くの人のためにならない」と思って断る人を「冷たい人だ」と判断する。正義よりも自分の安らぎを求める。それが一般である。そこで分析しなければならない。自分は本心で「叶えてあげたい」のか、他人に「冷たい」と思われたくないから叶えてあげたいのか。

そして次は「自分がこうしたい」と思ったとき。それは「他人にこうしてあげたい」と思う時、その行動は果たしてその人のためになるかということを考える必要がある。それは相手のためではなく「叶えてやりたい」という自分の欲求を満足させるためではないのか？それを吟味する必要がある。

私は、世間的付き合いで迷うことがよくある。冠婚葬祭で義理づきあいの連名で少額の香典をもらっても、お返しは個人なので出費がかさむ。またジミ婚のために、結婚の報告を受けても招待されなければ「御祝」を贈ってよいか悩む。相手は準備で忙しいのに、想定外のお祝いのお返しを用意する時間や気遣いが生じる。この付き合いは日本的慣習である。先の「やってあげたい」「こうしたい」と思う人は日本人的と言えなくもない。私は贈った以上に返ってこない方法に悩むのである。

私が過ごした時代、私が通った学校では会社経営者の子や両親を亡くして祖母に育てられている子、体の不自由な子、貧乏で遠足のおやつも買えない子、勉強ができない子、様々な条件下の子供がいた。今みたいに有名校へ入れるために母親が夜の街で働く変な平等感覚はなかった。貧乏な子には皆が少しずつお菓子を出し合い、落ちこぼれを出さないために成績の良い子が集まって、放課後に勉強のできない子を教えた。そして私が勤めた「義理の物品往来が日常茶飯事」の職場では、由緒ある家の人は義理で金品を贈ることがなかった。ちょうど財産を維持するのに大変な欧州の貴族が贅沢をしないように。そして気をつけなければならないのは目上、もしくは立場が上の人に対するお祝い。「下さる」という言葉があるが、それは上から下へと流れる意味を含み、上から降りてきたものにお返しをするのは失礼であるということである。上からのものは「いただく」にとどめる。そしてさらに国公立機関で、金品が賄賂につながる危険も学んだ。「自分があげたいから御礼やお祝いを贈る？」とんでもない。そんなことをしたら相手はクビになる。そんな経験を通して、私は自分の欲求を抑えて、不要な義理を省く人間になった。物を贈るとしたら欧米感覚のプレゼントである。「おめでとう」「ありがとう」を必ずしも金品に置き換える必要はないと思う。(2012.3.25)